

第八回日本秘境サミット

第八回日本秘境サミット神戸会議が去る九月三日十六道府県六九市町村の参加を得て開催されました。

一九八六年十一月に「物から心へ、嘆きから創造へ」をキャッチフレーズに、秘境の十八ヶ村が椎葉に集まって第一回日本秘境サミットを開き、その席上で「西日本四大秘境」の椎葉村、泉村（熊本県）東祖谷山村（徳島県）、十津川村（奈良県）を幹事村にして「日本むらおこしセンター」（通称MOC、事務局は大阪、理事長中瀬高住椎葉村長）を設立し、その後栗山村（栃木県）が加わって現在五村でMOCを運営しています。MOCの事業は秘境といわれる地域を中心とした自治体をネットワーク化して、開発、交流、政策研究、PR活動を行い、地域活性化のシンクタンクの役割を果たしていることとすることです。その最大のイベントが日本秘境サミットで、椎葉村で第一回を開いて以来今回で八回を数えます。

サミットでは秘境政策研究会に

多くの時間を割き、過去に論議された「国土保全奨励制度の創設」などが国政の場で具体的に検討されるなど着実に成果をあげています。今回のサミットでは、

一、秘境の小規模リゾートを考える。

二、秘境の森林資源の保全と都市の役割。

三、秘境の村の産業おこし

の三つをテーマとして各部門ごとに政策研究会が開かれました。

中武英雄県林務部次長、中瀬高住椎葉村長がパネリストとして登壇した第二テーマについて紹介します。二氏の他にコーディネーターに豊城邦民朝日新聞大阪本社編集委員、パネリストとして神谷拓雄国土庁官房審議官、伴次雄林野庁指導部計画課長、兵庫県総務部長、栃木県林務部長、和歌山県本宮町長、栗山村長が登壇しました。

今、山村は人と自然と動物と共生しながら森林資源（国土）を保全し活用しているが、この国土を守って行くには過疎化で農林業担い手が減少するなど限界がある。

都市の人達の理解と、国に対しては一つの施策として「森林交付税の創設」を考慮してほしい旨の提言があり、それぞれの立場から山村の果たす役割を理解いただき、現在自治省、国土庁、林野庁が中心になって進めている森林・山村検討会の成果を満たす意味からも「国土保全奨励制度」の具体策を望む声があがりました。

反面都市の立場から言えば、山村は都市に甘えてはいけない。故

郷であるという観念は一代限りで、二世、三世の代ともなれば都市が故郷であり、今後都市と山村が交流することにより諸問題を解決して行くということで研究会を結びました。

その他国立民族学博物館長の佐々木高明氏の記念講演、五村の議員と神戸市議との交流研修会等を実施しました。

又記念パーティでは「秘境遊食」と銘打って秘境（五村）の素材を都市の料理人（ホテルニューオータニ）の技で味わっていただきました。翌四〜五日は「遊食フェア」ということで神戸市民にも味わっていただきました。

六日は台風で椎葉村内の電話が不通になり、道路を迂回し、被害を心配しながら帰村したのですが、道路・山腹の決壊、河川の氾濫等災害の大きさに驚くとともに、国土（山林）の保全と開発の難かしさを改めて痛感しました。

椎葉村は今その災害復旧と十一月十二日から十四日の平家まつりに向かって職員、村民一体となって頑張っています。

（椎葉村企画開発課

椎葉寛充）

